



エコフィードを利用した高品質な豚肉生産を実現し、自社ブランド「三州豚」として販売を強化するとともに、若手農業者の中心として「夢農人(ゆめノート)とよた」の設立や「蔵cafe ころも農園」の開設など様々な取組で農業の地位向上を目指している、豊田市の鋤柄雄一さんをご紹介します。

農家の 8 代目として

鋤柄雄一さんは豊田市で代々続く農家の 8 代目。元は稲作農家でしたが、父親の代から養豚経営を始めました。

父親の跡を継ぐことは決めていましたが、「農業だけではなく、広い視野を持つことが必要。」と、大学では経済学を学び、卒業後は薬品会社に 3 年間勤務しました。

その後、アメリカに渡り、大学で学びながら養豚場でファームステイを体験します。この経験が、鋤柄さんの経営理念に大きな影響を及ぼすことになるのです。



鋤柄雄一さん

ブランド化で販売強化 - 生産者から経営者へ -

「日本の農家は自らを生産者と言うのに対して、アメリカの農家は自らを経営者と言い、生産したものを高く売ろうと考える。これでは勝負にならない。日本の農家も生産者から経営者になるべき。」と鋤柄さん。帰国後、平成 8 年に就農すると、繁殖経営の母豚を 600 頭から 1,000 頭に増頭するとともに、豊田市内での規模拡大が限界と感じると、平成 14 年には田原市に第 2 農場を新設し、肥育経営にも着手します。こうして、豊田市（繁殖）と田原市（肥育）の 2 つの農場で 15,000 頭の豚を飼育する鋤柄さんの養豚経営（屋号：トヨタファーム）の基礎が固まりました。

鋤柄さんは、アメリカの広大なメガファームでの体験から、「生産規模ではとてもかなわない。ブランドで勝負すべき。」と感じたとのこと。「生産規模がある程度に達したら、次は販売を強化する。」という経営理念に基づいて、ブランドの確立に取り組みます。着手したのは、田原市の肥育農場におけるエコフィードの利用。特にこだわっているのは、パンや麺など小麦由来の原料を中心に厳選すること。これにより、肉質が良くておいしい高品質な豚肉が生産できるとのことです。平成 20 年には自家配合飼料工場を新設するとともに、こうしたトヨタファーム独自の取



エコフィードの原料（乾麺）

組を生かして、平成 23 年には「三州豚」を商標登録し、自社ブランドの確立に成功しました。

「養豚経営を続けていくには、地域との共存を図ることが大切。」と話す鋤柄さん。浄化処理施設やたい肥化施設の整備はもちろんのこと、地域の役員も積極的に引き受けるなど、自ら実践してみえました。



三州豚

農業の地位向上を目指して

一方、鋤柄さんがかねてから懸念していたのは、農業という職業に対する世間のイメージ。「アメリカでは、食料を生産する農業は神様の次に尊い職業とされ尊敬されている。」とのこと。「日本の農業は立ち位置が低すぎる。もっと農業の地位を高めなければ将来はない。」との危機感から行動を起こします。

農業の未来と本気で向き合い、地元農畜産物の魅力と食の大切さを伝えていくため、豊田地域周辺の若手農業者に呼びかけて、平成 22 年 9 月に「夢農人とよた」を立ち上げます。最初は賛同者が得られず、2 名だけでの船出でした。しかし、鋤柄さんは、持ち前の行動力と青年会議所時代に培った組織運営のノウハウを駆使して、ホームページの立ち上げ、イベントの開催などに取り組みます。今では、鋤柄さんの地道な努力が実を結び、取組に共感した若手農業者が次々と集まり、会員は 30 名にまで増え、品目横断的な組織ができあがりました。

鋤柄さんは、初代会長として 5 年間「夢農人とよた」の礎を築いた後、会長職を後進に譲りましたが、現在も相談役として活動をサポートしています。

夢と誇りを持てる農業の実現に向けて

鋤柄さんは、異業種の企業とコラボして百貨店でキャンペーンを行うなど、地域農業の活性化に向けた取組を常に仕掛けてきました。

さらに、「株式会社 夢農人」を新たに設立して代表取締役役に就任するとともに、豊田市内の築 100 年の古民家を改装して、「夢農人とよた」の会員が生産した農畜産物や加工品を販売するマルシェと、その農畜産物等を食材としたメニューを提供するカフェを併設した「蔵 cafe ころも農園」を昨年 2 月に開設しました。

「ころも農園が早く軌道に乗るよう、収益性を高める工夫をしていきたい。こうした、農家と消費者とが直接つながる活動を拡大していくことが、農業の地位向上につながる。また、マスコミなどに取り上げられて価値を高めていくことも、農業が生き残っていくためには必要。」と鋤柄さん。

「夢と誇りを持てる農業の実現を目指したい。今の子どもたちに将来の夢を聞いても、農業という選択肢は返ってこない。『将来の夢は農業』と答える子どもたちが増えることが、私の夢。」と、力強く語っていただきました。



蔵 cafe ころも農園

執筆：農業経営課

取材協力：豊田加茂農林水産事務所農業改良普及課